

新羅王京の発掘調査

1 はじめに

当研究所では大韓民国慶州文化財研究所との共同研究において、2006年度より新たに「日韓発掘調査交流協約」を結び、双方の発掘現場への研究員の長期参加を中心とする研究交流を始めた。今年度は、国立慶州文化財研究所が調査をおこなっている皇南洞123-2番地遺跡および四天王寺址（図16）の発掘調査に9月18日から11月17日までの2ヶ月間、小田が参加し、研究交流をおこなった。その調査成果を報告する。

2 慶州皇南洞123-2番地遺跡の発掘調査

遺跡の概要 本遺跡は新羅の王宮である月城の北西にあたり、瞻星台と鶴林との間に位置する(図16・17)。調査区周辺は国立慶州文化財研究所による発掘調査がおこなわれており、大規模建物址が確認されている。とくに1988～89年の調査では、東西対称に配置される建物群を検出しており、北辺中央に中心建物、東西両側に3棟ずつ梁行2間の建物を南北に長く配列し、さらにその外側に梁行1間の建物を並んで配置する様相が判明している。

今回の調査では旧調査区南方に調査区を設定している。主な検出遺構は建物・タムジャン形遺構・道路・石列である。

建物 従来確認されていた南北棟礎石建物の南延長部分に加え、新たに3基の建物址を発見した。うち2棟は方2間の縦柱建物で、南北棟の建物で囲まれた内庭部で



図16 慶州市内遺跡分布図（東・田中 1988）

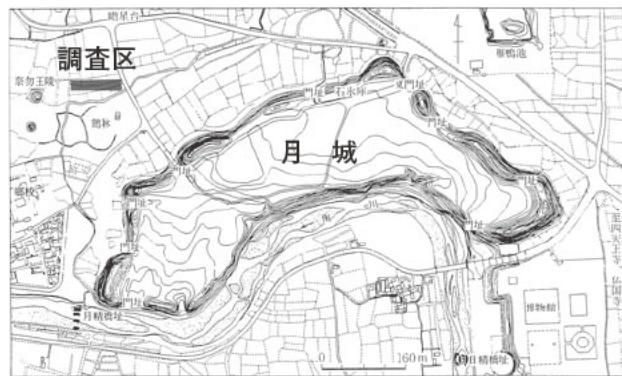


図17 皇南洞123-2番地遺跡調査区（東・田中 1988に加筆）

東西対称に配置されている。もう1棟は長軸が北東-南西方向に振れ、桁行8間以上の礎石建物である。

タムジャン形遺構・鎮壇具（図18）南北棟建物間の中央に位置する。割石を利用して築造され、一段のみ残存していた。形態はタムジャンと呼ばれる石築の垣状施設に類似しているが性格は不明である。中央南辺部分に花崗岩製の長台石が2条東西に平行する。

この遺構の前面において鎮壇具が発見された。検出された土壙は6基で、うち5基に丸底の短頸壺が納められていた。さらにそのうち3基には印花文土器の蓋が被せてあった。

道路・石列 道路は重複関係から、本調査区で最も古い時期の遺構と考えられる。5~10cm大の石・瓦片を利用し路面としている。一部において幅12cm前後の轍が確認された。この道路に石列と礎石建物が重複している。この石列は基壇建物の基壇外装の一部であると考えられる。

本調査区で検出された各遺構の時期変遷は重複関係から道路→石列（基壇建物）→礎石建物→タムジャン形遺構・鎮壇具となる。遺物の整理途中であるため、各遺構の時期については明らかでない。

韓国において、新羅時代・統一新羅時代を通じて、このような東西対称の建物配置はなく、建物群の性格が注目される。



図18 タムジャン形遺構と鎮壇具

3 四天王寺址の発掘調査

遺跡の概要 四天王寺の創建の経緯について『三国遺事』によると、文武王9・10年(670・671)に、唐高宗の新羅侵略に対し、文武王が明朗法師の建言により、狼山南麓の神遊林に寺を建て文豆婁秘法をおこなったところ、風雨によって唐の軍船は全て沈没したという。その後、改めて寺を造ったと伝える。『三国史記』文武王19年(679)8月条には「四天王寺成」とある。四天王寺址は戦前の調査により、木塔を東西対称に配し金堂・講堂をもつ双塔式伽藍配置であることが推定され、塔を中心に緑釉・褐釉・無釉の四天王像を浮彫にした磚の断片が発見されていた。

今回の調査では寺域の西側を中心に調査区を設定し、西木塔・西回廊・西軒廊などを検出した。

西木塔(図19) 調査では西木塔を全面的に発掘した。基壇は風化岩盤が混じる砂質土と大きな割石を互層に積み上げ、版築状に盛土している。そして、基壇上面の礎石位置を掘り下げ、底部に根石を詰めた後、方形柱座を造り出した礎石と心礎を据えている。基壇外周には幅1.3mの犬走り(塔区)を設けている。基壇外装は地覆石上に、隅柱と束柱を立て、木口に唐草文をもつ長方形磚をその間に充填した構造である。長方形磚は最も良好な部分では3段が残る。また、木塔の四面中央には階段を設けるが、西面階段とりつき部の北側では、緑釉四天王像磚の一部が地覆石上に設置された状態で原位置を保って出土した(図20)。従来不明であった四天王像磚の使用状況が明らかになった点は大きな成果である。

基壇規模を復元すると、一辺の最大幅9.9m、塔区を



図19 四天王寺址西木塔全景(南から)



図20 緑釉四天王像磚出土状況

含めると12.4mであり、基壇の高さは1.4mほど、階段幅は2.45mほどである。

西回廊・軒廊 金堂から東西に延び、回廊に接続する西軒廊を確認した。従来の伽藍復元では、軒廊は想定されておらず、今回の発掘調査で存在が明らかになった。桁行9間、梁行1間である。柱間寸法は2.5~2.6mで東西距離は21.0~21.4mである。礎石は全て失われていたが、根石を良好に残し、その石材は大部分が割石であったが、部分的に大きな自然石を使用している。

西回廊は軒廊と直角に交差し、南北方向に繋がる状態が検出できた。軒廊とりつき部の北側で、東西に横切る排水路が確認された。底に外側へ傾斜する石を敷き、両側面に磚を積んでいる。

回廊基壇外側では、高麗時代中期以降と見られる建物址が発見され、四天王寺廃絶後の姿が分かる。ここからは統一新羅時代の鳴尾が出土している。

4 おわりに

両遺跡ともに遺物整理の途中であり、遺跡全体の詳細な検討やその解釈については今後の課題である。日韓発掘調査交流においては、発掘現場における研究交流を中心とし、日韓都城制の比較をはじめとする共同研究を進めていく予定である。次年度以降も、両国研究者間の活発な意見交換を通じて、日韓交流の持続的発展と研究の深化が望まれる。

(小田裕樹)

参考文献

- 国立慶州文化財研究所2006a『慶州皇南洞123-2番地遺跡発掘調査』(諮問委員会資料)。
国立慶州文化財研究所2006b『慶州四天王寺址(史蹟第8號)発掘調査』(諮問委員会資料)。
東潮・田中俊明1988『韓国の古代遺跡 1 新羅編(慶州)』中央公論社。